

創建

そうこん

巻頭言／濱田幸雄・1

原点回帰／創刊号巻頭言に学ぶ・2

新発見「ナスカの地上絵」／本多薫・3

博士（工学）学位論文・4

修士学位論文・5

卒業研究発表会プログラム・6

創建総目録（No. 101～No. 120）・7

卒業式・修了式の受賞者／創建ニュース・8

2007・3・25 VOL.41 NO.3（通巻121号）

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

昨今、巷間を賑わせている放送番組の捏造問題は、関西だけでなく在京キー局の番組でも指摘されている。その内容は、一般に人には聞こえないとされている20,000 (20k) Hz以上の周波数成分を持つ高周波（ハイパーソニック）を聞くことで、脳波のひとつであるα波が出て、その結果集中力が増すというもの。裏付けとして、風鈴が置かれた学習塾や研究論文を取り上げた。しかしこの論文は、音によって脳内の血流が増すとは言っているが、集中力や記憶力に関しての研究は含まれていなかった。学習塾と、研究論文の扱いに捏造があったのではないかと指摘されているのである。実はハイパーソニックの話は、20年以上も前に学会内に大きな論争を巻き起こした話題なのである。ほんとうは聞こえるのかもしれない。いや、実験手続きに検討の余地がある、などいろいろな意見があり、結論はでていない。

人の可聴域は20Hz～20kHzというのが現在の音響学の常識である。そのため、サンプリング定理（サンプリング周波数は信号帯域の2倍必要）より一般のCDプレーヤなどのサンプリング周波数は44.1kHzあるいは48kHzとなっている。ではなぜオーディオ機器で192kHzあるいは2.8224MHzサンプリングを謳うものがあるのか？その答えは、演奏音や楽器の音には20kHz以上の周波数成分が確かに存在するからに他ならない。弦楽器、金管楽器、電子楽器ではせいぜい10kHz程度までだが、クラベス、トライアングル、シンバルなどの打楽器では100kHz付近まで音の成分が存在するのである。人には聞こえないから再生する必要がない、だから本来ある情報だけ削除して構わない、このような考え方は音響技術者としては許されないもの。値段が高くなったとしても、本来あるべき音まで再生できる機器の性能を

理解してくれる人が、あるいは日が必ずあるはずだと思いたいという、技術者の心の叫びが、これらの機器を開発させているように思える。また、従来のLPレコードなどアナログ録音による物理的な再生上限周波数は20kHz未満であるが、一部のオーディオファンの中には、CDにはない音が聞こえるという人がいる。これはアナログ機器特有の理由、つまりLPレコードを例にとると、回転のむらによる音のゆらぎ、溝にできた傷あるいはつまった埃による音の変化などが、感性に訴えている部分があるように思える。これに対して、デジタル方式は記録された情報を完全に再生してしまうため、暖かみにかける音、などと言われるの

聞こえない音に耳を すまし、聞きたくない 音に耳を傾ける

濱田幸雄

はないだろうか。

日本のものの作りに警鐘が鳴らされている。先のLPレコードでも、オーディオファンを納得させるためには、録音技術は勿論、レコード材料の品質確保、カッティング時の機器のメンテナンスや操作、輸送時の変形防止など、全ての過程に高度な職人芸が要求されていた。どこか一部でも手抜きがあれば、品質が保証されないのがアナログの世界だったのである。ところがCDにおいては、多少の傷があっても情報の欠落が生じても、補償回路の働きにより聞いた感じでは音質に差が現れない場合が多い。これでは、生産者・消費者双方のメディアの扱いが多少ぞんざいになっても仕方ないと思われる。

映画業界や音楽業界では、アナロ

グからデジタルへ、さらに符号化においては情報を圧縮しない方式（PCMあるいはWAV）から非可逆圧縮のMPEG3、MPEG4への流れがどんどん加速している。デジタル技術の特質、インターネットとの融合、さらに安く手軽にという消費者の要望を考えれば、当然の流れであり、この流れを変えることは現実的には不可能である。しかし、このままで本当によいのだろうか？ 実際、業界内においても、MPEG3、MPEG4などの符号圧縮技術の評価は、デジタル技術の洗礼を受けていない人々にこそしてもらわなければならない意見がある。もしかしたら、アフリカの奥地で、視力8.0、聴力レベル20dBという人間本来の能力を駆使して獲物を追っている人々にとっては、非圧縮と圧縮の差が、はっきり分かるのかもしれない。それなのに、疲れた目や加工された音しか聞いたことのない一部の人が現在の技術の評価をしてしまったのは、本来の情報を失ったメディアで、将来芸術を人々に伝えてしまうことになるかもしれないのである。

聞こえない音（声）に耳をすますのは、ものの作りの原点であるばかりでなく、人間関係においても基本である。批判は広く浸透するが当人の耳には入りにくいものであり、他人の苦言も、自分に余裕がないときには素直に聞くことができず、あとからその有難さを実感することが多いのもまた事実であろう。

卒業生の皆さん、自分のまわりの聞こえない音（声）に耳をすましていただきたい。聞きたくない助言や苦言こそ、自分にとって価値のある情報と考えて、社会人として行動していただきたい。最後に、最も聞きにくい音、自分の身体や心の悲鳴には、最大限耳をすましていただきたい。ご卒業を心よりお祝いし、ご健康をお祈りいたします。（助教授）

原点回帰 ～ 創刊号巻頭言に学ぶこと ～

建築学科機関誌の「創建（そうこん）」は、1966年4月に発刊されて40年余を越え、本誌で通巻121号となった。初代の編集長は、当時、新進気鋭の谷川正己助教授であった。その創刊号の巻頭言を飾ったのが、倉田 博助教授（故人）の「惜別」と題する玉稿で、何度読み返しても当時の学生と教員の交流が偲ばれて、心が熱くなる。本学部が「家族大学」といわれた由縁が垣間見える一文である。当時の学生は、いわば団塊の世代の始まりで、今では社会の第一線を退いた者も少なくないであろう。卒業記念号にふさわしい内容で、ここに再録（原文のまま復刻）するものである。

1966・04・11 / VOL. 1 NO. 1

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

この機関誌を創建（そうこん）と称することにしたい。その名は幸田先生の御発案によるものである。又この機関誌の生れるまでには谷川先生のなみなみならぬ御尽力のあったことも併せて御知らせしておきたい。今後はこの機関誌を通じて学生諸君への伝達、報告、記録等を兼ねる事にした。大体年に二回其他必要に応じて臨時に発行する予定である。

工学部と云う新しい部名によって新学期がいよいよ始まる事になった。校内では大講堂、図書館、正門等の工事も着々と進捗し相ついで完成をみるのも間近である。更に河沿いに校内を通過する大舗装道路の完成と相まって学内の景観も一変し堂々たる偉容を誇るに足るであろう。

それと共に学内の主な役職陣も一斉に若返りを見せることとなり、こゝに文字通り名実共に新しい出発と云うことが出来るであろう。

建築科に於ても昨年度より諸先生方を迎えてその陣容は誠に多形である。今やとて編成を終った時間割をあらためて眺めて見てもつくづく今昔の感に堪えない。

こゝ数年来最も入学志願者数の多い建築科は本年度も、又最大数の志願者の中から選ばれた新入生諸君を迎えて学内第一の学生数を擁する科である。我々教職としてもその責任の重圧を感じざるを得ない。多人数教育は事の善悪は別として我々の当面の現実問題である。理工、生産両学部の間において本学部の基本方

針は実学である。この方針に基づき建築科に於ても本年度より実験、実習、製図、演習の強化を実施することになった。この事は新しい時間割を見れば明らかであろう。学生諸君もその主旨に従って、出来るだけ諸先生方に親しく接する様に心がけ、その人格を通して実践的工学を身につけ、更に深く学問の本質に想いを致されんことを望む次第である。

第二工学部最後の卒業生 211 名が

惜 別

倉 田 博

我々の目前からまるで潮が引く様にその姿を消して行ったのもつい先日のである。その印象はいまだ余韻を残して鮮かである。この1年間は狭い研究室の中で卒論の学生諸君と難居していたせいとか特に惜別の感が深い。あの学生も、この学生もと遠く見送る思いである。

- 卒業決定の知らせを聞いて電話の前で絶句した7年生
- 卒業出来ないと聞いてだまってこふして涙をぬぐって行った学生
- もし落第したら送金を打切られると訴える学生
- 多情多恨にして服毒に及んだ学生
- いくら御説教しても一向に通じない学生
- 郷里に就職をさがしてくれと頼む母子家庭の学生
- 蝶と聖書とカロッサを受する優しい学生
- バーンステイン指揮のマーラーしか聞かない学生

- 快活で明るい学生がさりげ無く話して行った家庭の事情
 - 優等生候補でありながら一科目で保留になり保留試験で100点を取って行った学生
 - 夜おそくまで研究室で人生を論じて行った卒業保留の学生
 - 卒業しても家には帰らないと云う学生
 - 北国に就職して頭を冷して来ますと電話して来た学生
 - 印象派で温い色の絵が好きだと話して行った学生
 - カンニングであげられて無実を主張してゆずらなかつた学生
 - 製図の提出期限には必ず後れる学生
 - 研究室の扉から首だけのそかせて決して室内に入らなかった学生
 - 何のためらいもなく故郷の教職に赴任して行った学生
 - 東京の設計事務所であれば就職しないと4月までがんばる学生
 - そんなことをしたら死んでしまうと医者に云われながら病院で卒業設計をかいた学生
 - 又その学生に快よく輸血を申出てくれた多くの学生
 - 再三落第する様に説得したのに遂に優等生になってしまったへんな学生
 - 研究室の時計をだまって直して行ってくれた学生
 - 「いろいろ御世話になりました」とだけ最後の答案に書き残して行った学生
 - 試験期間中は母さんが下宿でつき切りだった身体の弱い学生
 - 会社を首になったら必ず学校へ帰って来いよと云ったら、御期待に添いかねますと笑って行った学生
- あの子も、この子も、みんな、お仕合せに。 （助教授）

4月4日 研究室にて

特別寄稿

「ナスカの地上絵」の新たな発見について

大学院博士後期課程 本 多 薫（山形大学 助教授）

ナスカの地上絵は、南米ペルーの首都リマから直線距離で約400キロメートル南のアンデス山脈の西側に位置する亜熱帯の砂漠地帯の台地に描かれています。1994年12月にユネスコ世界文化遺産に登録され、世界七不思議の一つと言われています。地上絵は、2000年以上前に描かれたと考えられていますが、その制作目的は明らかにされていません。また、車の走行や農地・道路建設などの開発により破壊が進んでおり、保護計画の策定が急務となっています。そのため、平成16年10月に山形大学人文学部内にプロジェクトチームを結成し、地上絵の分布図を作成することを通して、制作目的を解明するとともに、保護計画を策定するための基礎資料の提供を目的として、学際的な研究を進めています。プロジェクトメンバーは、山形大学の坂井正人助教授（文化人類学）、阿子島功教授（環境地理学）、渡邊洋一教授（認知心理学）、そして私（人間情報科学）の4名です。地上絵の研究は1920年代に始まったと言われていますが、先行研究では地上絵の分布は十分に把握されていません。そこで、高精度人工衛星（米国商業衛星Quick Bird、撮影直下点で0.61m分解能）から撮影された画像を分析し、地上絵の分布図を作成することを試みています。

ペルー文化庁等の調査研究により、ナスカ台地に動物や植物などの具象的な地上絵が30点以上、直線の地上絵が760本以上、幾何学図形（台形・三角・渦巻き形）が220点以上も存在することが報告されています。しかし、私たちがナスカ台地を撮影した人工衛星画像を分析した結果、これまで報告されていなかった地上絵が100点以上も見つかりました。その大部分は直線や幾何学図形ですが、生物図像も1点見つかっています（図1参照）。この図像は、ナスカ台地の南部から発見され、全長は約65メートルで、生物を写実的に描いたのではなく、誇張・変形が施されています。坂井助教授は、上部にある突起物がナスカ期（紀元前100年～紀元後600年）の土器にも見られますので、この時期に制作された可能性が高いと述べています。また、発見した地上絵の右下には車の走行した跡があり、一部が破壊されているのが確認できます。

衛星画像から抽出した地上絵（線画）には、不鮮明な部分や道路、地形の影などのノイズが混入しており、最終的な確認は現地調査（航空機をチャーターしての確認作業）が必要となります。また、地上絵の正確な描画位置を特定するために、現地調査で収集したGPS（Global Positioning System）データとの照合が必要です。これらの作業をもとに、分布図のデータベース構築を目指しています。

古代アンデス社会の建造物（神殿など）は計画的に建設されたものが多いと言われています。分布図のデータベースの完成後は、地上絵も計画的に配置されたとの仮説を立て、地上絵の位置関係や規則性の有無などを検討する予定です。ナスカの地上絵プロジェクトのホームページは、<http://nasca.yamagata-u.ac.jp> です。



図1 新たに発見した地上絵（生物図像）

祝 平成18年度 博士（工学）学位論文の紹介

本年度は、本学大学院工学研究科建築学専攻において、博士後期課程修了者1名が博士（工学）の学位を取得された。なお、同氏は、社会人特別選抜による大学院生で、現在、山形大学助教授である。ここに、当該論文の要旨を紹介する。

「心拍変動を指標とした地下街移行動作時の生体計測に関する研究」

建築学専攻 本 多 薫

全国に大規模な地下街が建設され、ショッピング街や公共交通機関の連絡通路等として広く利用されている。近年では、総床面積が20,000㎡を超える地下街、深度42.3mに地下鉄駅が建設されるなど大規模化および深度化が進んでいる。このような地下利用の円滑な遂行と適正かつ合理的な利用を図るため、平成12年5月に「大深度地下の公共的使用に関する特別措置法」が制定され、平成17年7月には、「大深度地下の公共的使用におけるバリアフリー化の推進・アメニティーの向上に関する指針」（国土交通省）を定めている。この指針では、地上との移動距離・時間の増大、施設の閉鎖性、迷路性などを取り上げ、課題や講ずべき処置を示している。特に円滑な移動と、より快適な内部環境を創出するためのデザインの配慮等の必要性を述べている。そのため、地下街における人間行動と快適性に関する研究が求められている。

人間が行動する場合には、歩行や階段昇降などによる姿勢の変化に伴う移行動作が発生する。特に地下街では歩行により移動することが一般的であり、平坦な通路、地上と地下との連結に伴う階段やエスカレータの使用、幅員や天井高の制約などの地上とは異なる特有な環境での移行動作がある。人間は視覚や聴覚などから情報入手し、判断や動作に伴い様々な生理的な生体反応を示すが、地下街における移行動作時にも、様々な生体反応が起こると考えられる。また、生体反応の計測手法の一つに心拍変動のスペクトル解析があり、自律神経活動を計測する試みが行われている。心拍変動の成分には、高周波数成分（HF成分）と低周波数成分（LF成分）があり、HF成分は副交感神経活動を示し、LF成分は交感神経と副交感神経の両方の支配を受けているが、主に交感神経活動を示すといわれている。このことから、本研究では心拍変動を指標とした地下街移行動作時の生体計測に関する検討を行った。本論文の構成と概要は以下のとおりである。

第1章では、研究に至った経緯、目的、構成について述べた。

第2章では、本研究の知識的背景を明らかにするために、地下街の特有な環境、地下街の移行動作を分類し、その特徴を述べた。心拍変動については、自律神経活動との関係や心拍変動を用いた生体負担の評価の有効性について、先行研究を取り上げながら論じた。

第3章では、心拍変動を指標とした生体計測について検討するために、視覚情報、聴覚刺激、精神的作業が心拍変動に与える影響に関する3実験を取り上げ、その結果と考察を述べた。これらの3実験より、LF成分とHF

成分のパワーの総和には個人差があり、LF/HFの値を被験者間の比較に用いることには問題があることを指摘するとともに、心拍変動から精神的負荷による生体反応を捉えられることを示した。

第4章では、移行動作時の心拍変動の変化を検討するため、基本的な移行動作である起立動作と歩行動作の実験について述べた。実験結果より、両動作において移行動作を開始するとR-R間隔時間が急激に短くなるとともに、HF成分の減少とLF/HFが増加することを示した。しかし、平坦な廊下の歩行中には、歩行による負荷量が一定となり交感神経と副交感神経が拮抗し、LF/HFの変動は小さくなることを明らかにした。

第5章では、進路変更の移行動作における精神的負担を検討するため、コンピュータ・シミュレータを用いた地下街の移動実験について述べた。実験結果より、進路変更の回数が多くなり、歩行経路が複雑になると主観的評価での「圧迫感のある」、「緊張した」、「複雑な」の評価が高くなる傾向が見られるとともに、LF/HFの増加が認められ、交感神経活動が高まることを示した。

第6章では、実際の地下街（総床面積約18,000㎡の地下ショッピング街）における歩行実験について述べた。実験結果より、秒単位のLF成分とHF成分を抽出し、PSB（安静時と歩行時でのLF/HFの比率）を算出することにより、地下街歩行時の階段の利用や交差点での進路確認などの生体負担が大きいと思われる移行動作時において、PSBの増加が認められ、時々刻々と変化する移行動作時の生体計測が可能であることを示した。

最終章では、本研究で得られた結果を総括し、以下のように結論づけた。心拍変動をスペクトル解析し、その変動成分から自律神経活動を捉えることにより、移行動作時の精神的・身体的負担を生体計測することができる。地下街では、階段昇降などの移行動作時の身体的負担以外にも、案内板やサインによる情報入手や進路確認動作などの移行動作時には精神的負担がある。このような精神的負担を心拍変動を指標として生体計測できることは、より快適な地下街を計画するための評価手法の一つになるものと考えられる。

*当該論文の審査委員会は、下記の5名であった。

主査：若 井 正 一（日本大学工学部 教授）

副査：三 浦 金 作（日本大学工学部 教授）

尾 股 定 夫（日本大学工学部 教授）

長 澤 泰（東京大学大学院 教授）

大久保 堯 夫（日本大学 名誉教授）

平成18年度 修士学位論文審査発表会プログラム

日時：平成19年2月19日（月） 場所：70号館（新教室棟）3階 7034教室

1 地方都市における駅前広場整備手法に関する研究

発表者：阿 部 憲 介

（指導教員：三浦金作 教授，土方吉雄 助教授）

8 連続繊維補強材およびポリマーセメント系接着剤を用いたRC梁の曲げ・せん断補強効果に関する研究

発表者：鈴 木 祐 介

（指導教員：倉田光春 教授）

2 定着長さの異なる斜補強筋および繊維補強高強度コンクリートを用いた柱・梁接合部の弾塑性挙動に関する実験的研究

発表者：桑 田 陽 平

（指導教員：倉田光春 教授）

9 介護老人保健施設内自力移動者の避難経路選択に対する空間認知能力と学習機能に関する研究

発表者：平 奈穂美

（指導教員：狩野勝重 教授，松井壽則 助教授）

3 建築用ポリマーセメントモルタルの防火性能

発表者：國 分 友 貴

（指導教員：大濱嘉彦 教授）

10 環境共生型居住地整備に関する研究

発表者：田 邊 誠

（指導教員：三浦金作 教授，土方吉雄 助教授）

4 表面含浸材の性能評価法

発表者：佐々木 一 人

（指導教員：出村克宣 教授）

11 ポリマーコンクリート用廃発泡ポリスチレン溶液の貯蔵安定性

発表者：津久井 勲

（指導教員：大濱嘉彦 教授）

5 壁の解析に関する基礎的研究

発表者：篠 崎 賢 司

（指導教員：倉田光春 教授）

12 学校における教室用机・いすの周囲に構成される動作スペースの計測に関する研究

発表者：根 本 賢

（指導教員：若井正一 教授）

6 児童の遊び環境に関する調査研究

発表者：杉 本 昇 平

（指導教員：三浦金作 教授，土方吉雄 助教授）

13 通所型在宅介護サービス提供施設のサービス圏域に関する研究

発表者：別 所 知 彦

（指導教員：狩野勝重 教授，松井壽則 助教授）

7 三次元円弧部材の基礎的研究

発表者：鈴 木 綾 香

（指導教員：倉田光春 教授）

14 既成市街地における防犯環境設計に関する研究

発表者：山 浦 茜

（指導教員：三浦金作 教授，土方吉雄 助教授）

平成18年度 建築学科卒業研究発表会プログラム

開催日：平成19年2月1日（木） 会場：工学部70号館1階 7014教室（五十嵐ホール）

1. 自己修復機能を持つ硬化剤無添加エポキシ樹脂混入ポリマーセメントモルタルの圧縮強さ発現
(指導 大濱 嘉彦 教授) 鈴木 良平
2. 竹補強モルタルの開発 ― 曲げ性状 ―
(指導 出村 克宣 教授) 高橋 昌孝
3. 木造住宅基礎のプレキャスト化に伴う接合方法
(指導 渡澤 正典 専任講師) 麻生 孝明
4. ポリマーセメント系接着剤を用いたCFRP補強RCはりの曲げ・せん断補強効果に関する実験
(指導 サンジェイ・パリーク 専任講師) 田子 務
5. 空間曲線材の解析プログラムの開発
(指導 倉田 光春 教授) 五十嵐嵩浩
6. 鋼構造部材の簡易型継手の開発に関する研究
(指導 浅里 和茂 助教授) 黒薮 勇人
7. 細長い平面形を有する建物の立体振動解析
(指導 千葉 正裕 助教授) 志賀 竜太
8. 個別要素法による歩行者の動線計画シミュレーションに関する基礎的研究
(指導 野内 英治 専任講師) 佐久間啓太
9. 室の内部状況が内部音源法の測定結果に与える影響
(指導 濱田 幸雄 助教授) 秋光 昂
10. アメダスデータの整理 ― 瀬戸内地域の気温と傾向 ―
(指導 八町 雅康 専任講師) 児島 英介
11. 日本近代建築史からみた大越娯楽場 ― 今和次郎とユージェントシュティルの流れ ―
(指導 狩野 勝重 教授) 宮坂紗代子
12. 街路空間における探索歩行時の注視に関する研究
(指導 三浦 金作 教授) 辻本 圭佑・小林 修士
13. 児童の遊び場に関する調査研究
(指導 土方 吉雄 助教授) 川口 未生・鈴木 大・富岡 慎介
14. 学習用机・いすの機能性に関する人間工学的研究
(指導 若井 正一 教授) 森 朋彦・小沢 桂太
15. 高齢・障害者の住宅改造・改修計画に関する研究
― 住宅改造・改修による対象者および家族のQOL向上について ―
(指導 松井 寿則 助教授) 多賀由香里
16. 子ども部屋における近年の動向と使用実態に関する研究
(指導 市岡 綾子 専任講師) 勝村知香子・清水 保寿・村上亜都子・小野亜沙子
17. 階段・スロープの研究 ― 視点場と指摘物から見た階段・スロープ空間の分析 ―
(指導 浦部 智義 専任講師) 志賀 文美

創建 総目録

(No.101~No.120)

第101号 (Vol. 34 No.1 1999. 4. 10)

巻頭言・岩崎 博	1
近未来建築のキーワードと 建築基準法	
随想・谷川正己	2
路面電車礼賛	
黒田助教授・博士(工学)に	3
就職戦線	6
修士論文・桜建賞	8
工学部役職者就任あいさつ	10
倉田次長、若井図書館長	
教室ニュース	11
学科教職員名簿	12

第102号 (Vol. 34 No.2 1999. 7. 7)

巻頭言・若井正一	1
器と中身	
新任の先生	2
福島暁男、神蘭勝彦、近藤典夫、 小菅 哲、佐賀武司、中川誠一、 長谷川一美、古市徹雄	
卒研テーマ一覧	6
卒研受理者一覧	8
教室ニュース	9

第103号 (Vol. 34 No.3 2000. 3. 25)

巻頭言・倉田光春	1
自ら問うて学ぶ	
ネットワークOB&OG	2
辺見美津男	
野内英治・博士(工学)	4
卒業生に贈る言葉	6
修士学位論文	8
退職・谷川正己	11
教室ニュース	12

第104号 (Vol. 35 No.1 2000. 6. 30)

巻頭言・岩崎 博	1
幸せの器	
随筆・S. N. パリーク	2
My home-town Jodhpur	
卒研テーマ	4
卒研受理者	6
新任の先生	11
浜原正行、宇杉和夫、 佐藤篤史、中村 弘	
学科教職員名簿	12

第105号 (Vol. 35 No.2 2001. 2. 15)

* 2000年日本建築学会大会記念号	
巻頭言・岩崎 博	1
大会を終えて	
大会記念講演・勅使河原宏	2
教室ニュース	24

第106号 (Vol. 36 No.1 2001. 4. 10)

巻頭言・出村克宣	1
4コース制となる建築学科	
ネットワークOB&OG	2
早野由美恵	
浅里助教授・博士(工学)に	4
修士学位論文	6
コンペ受賞・栗原隆	10
学科教職員名簿	12

第107号 (Vol. 36 No.2 2001. 7. 7)

巻頭言・若井正一	1
環境移行	
インド西部地震被害調査	2
博士への道・大濱嘉彦	4
朱明基院生・博士(工学)に	5
卒研テーマ一覧	6
卒研受理者一覧	8
新任の先生	10
関沢勝一、野内英治	
栗原院生・設計競技大臣賞	12

第108号 (Vol. 36 No.3 2002. 3. 25)

巻頭言・松井壽則	1
UDの思想とBFの目	
ネットワークOB&OG	2
田中マリ子	
博士への道・倉田光春	4
修士論文テーマ	5
私の履歴書	6
佐藤昭一、春山哲郎	
就職戦線かく戦えり	8
国家公務員。種合格者報告	9
松下信楨	
新任の先生・市岡綾子	11
教室ニュース	12

第109号 (Vol. 37 No.1 2002. 7. 10)

巻頭言・出村克宣	1
建築がイメージできますか	
ネットワークOB&OG	2
永田 進	
卒研テーマ一覧	4
卒研受理者一覧	6
教室ニュース	9
新任の先生	10
根上彰生、阿部直人、 藤田延幸、辺見美津男、 水野谷梯子、陽田秀夫	
学科教職員名簿	12

第110号 (Vol. 37 No.2 2003. 3. 25)

巻頭言・黒田浩司	1
わが家は安全か	
卒業生に贈る言葉	2
新任の先生・佐久間宏一	5
博士(工学)学位論文	6
五十嵐賢次、熊谷慎祐、 崔 洛運	
桜建会80周年記念事業	12

第111号 (Vol. 38 No.1 2003. 7. 7)

巻頭言・浅里和茂	1
ネットワーク社会に生きるために	
博士への道・岩崎 博	2
卒研テーマ一覧	6
卒研受理者一覧	8
新任の先生	11
滝澤雄三、松本文夫	
新任の職員・小林まゆみ	11
学科教職員名簿	12

第112号 (Vol. 38 No.2 2004. 1. 13)

巻頭言・土方吉雄	1
チンコロちゃんが翔る里山	
建築家への道・中尾 実	2
産学連携への道・湯本長伯	4
博士への道・佐藤 平	6
学術論文・研究発表	7
教室ニュー	8

第113号 (Vol. 38 No.3 2004. 3. 25)

巻頭言・出村克宣	1
建築材料屋からの一言	
ネットワークOB&OG	2
川崎三十四	
建築文化賞(正賞)受賞記念	4
只見小学校・陽田秀夫	
県立郡山養護学校・渡部和生	
特別寄稿・清水忠男	8
おもいやりのデザイン	
修士学位論文	11
卒業修了式の各賞受賞者	12
教室ニュース	12

第114号 (Vol. 39 No.1 2004. 7. 10)

巻頭言・倉田光春	1
自己研鑽	
卒研テーマ一覧	2
卒研受理者一覧	4
帰朝報告・大濱嘉彦	6
韓国国立全北大学校に滞在して	
新任の先生・中尾 実	7
福島県県費留学生	7
瀨田なおみカリナ(ブラジル)	
学科教職員名簿	8

第115号 (Vol. 39 No.2 2005. 3. 25)

巻頭言・濱田幸雄	1
人を幸せにする声・音	
ネットワークOB&OG	2
三浦敏伸	
建築家への道・松本文夫	6
学術研究報告会	8
修士学位論文	10
新任の先生	11
中村光彦、上原茂男	
卒業式・修了式の表彰者	12
教室ニュース	12

第116号 (Vol. 40 No.1 2005. 7. 10)

巻頭言・若井正一	1
生き物との共生	
卒研テーマ一覧	2
卒研受理者一覧	4
大学院生一覧	6
新任の先生	7
浦部智義、早草睦恵	
教室ニュース	7
学科教職員名簿	8

第117号 (Vol. 40 No.2 2006. 1. 20)

巻頭言・大濱嘉彦	1
少子高齢化と人口減の下で 技術革新の重要性	
ネットワークOB&OG	2
関根敬次(福島工業高校校長)	
海外派遣研究員報告	4
土方吉雄	
ヨーロッパ研修旅行報告	6
若井正一	
教室ニュース	8

第118号 (Vol. 40 No.3 2006. 3. 25)

60周年記念新教室棟(写真)	1
博士(工学)学位論文	2
林 志翔、日比野 巧	
修士学位論文	3
学術研究報告会	4
学術論文・研究発表	6
卒業式・修了式の表彰者	8
教室ニュース	8

第119号 (Vol. 41 No.1 2006. 7. 7)

巻頭言・浦部智義	1
音楽の都ウィーンでの体験	
卒研テーマ一覧	2
卒研受理者一覧	4
大学院生一覧	6
新任の先生	7
ガン・ブンタラ	
福島県県費留学生	7
五島デニス(ペルー)	
教室ニュース	7
学科教職員名簿	8

第120号 (Vol. 41 No.2 2007. 1. 10)

巻頭言・大濱嘉彦	1
イノベーションと人づくり 教育のあり方	
特別寄稿・尾登誠一	2
マイ・デザイン・コンシャス	
学術研究報告会	8
学術論文・研究報告	10
教室ニュース	12

注：第116号より本誌のサイズが、B 5 版からA 4 版になった。
なお、第107号より本学建築学科ホームページ上で全文(PDF)を掲載している。(若)

祝 平成18年度 卒業式・修了式の表彰者 斉藤賞、北桜賞、桜建賞、優等賞

《 斉藤賞 》

◇ 修士論文

「既成市街地における防犯環境設計に関する研究」

受賞者：山浦 茜

(指導：三浦 金作 教授, 土方 吉雄 助教授)

《 北桜賞 》

◇ 修士論文

「連続繊維補強材およびポリマーセメント系接着剤を用いたRC梁の曲げ・せん断補強効果に関する研究」

受賞者：鈴木 裕介 (指導：倉田 光春 教授)

◇ 修士論文

「建築用ポリマーセメントモルタルの防火性能」

受賞者：國分 友貴 (指導：大濱 嘉彦 教授)

《 桜建賞 》

◇ 卒業設計

「緑の地から ―東京都の緑化推進モデルケースの提案―」

受賞者：篠木 正義

(指導：浦部 智義 専任講師)

《 桜建賞 》

◇ 卒業論文

「子ども部屋における近年の動向と使用実態に関する研究」

受賞者：小野亜沙子, 勝村知香子, 清水 保寿,

村上亜都子 (指導：市岡 綾子 専任講師)

「自己修復機能を持つ硬化剤無添加エポキシ樹脂混入ポリマーセメントモルタルの強さ発現」

受賞者：鈴木 良平 (指導：大濱 嘉彦 教授)

「鋼構造部材の簡易型継手の開発に関する研究」

受賞者：黒藪 勇人, 斉藤 高央, 松島 宏俊,

大関 博豊 (指導：浅里 和茂 助教授)

「児童の遊び場に関する調査研究」

受賞者：川口 未生, 鈴木 大, 富岡 慎介

(指導：土方 吉雄 助教授)

《 優等賞 》 受賞者：岡田 博美, 松島 由佳

■濱田助教授は、日本騒音制御工学会研究部会において平成19年春季研究発表会実行委員会委員長に選出された。(9月21日)

■土方助教授は、12月26日、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所より一般国道4号針生高架橋下有効利用検討委員会委員を委嘱された。

■本多院生の博士学位論文発表会が、12月22日に新教室棟7061教室で開催された。その後、2月8日の本学部大学院分科委員会において審議の結果、博士(工学)の学位授与が承認された。(本誌に論文要旨掲載)

■若井教授は、1月16日に福島市杉妻会館で開催された福島県建築文化賞授賞式において審査委員長として審査講評と賞状の授与などを行った。

■土方助教授は、1月30日、福島県より「第2回持続可能な歩いて暮らせる新しいまちづくりセミナー」の講師を依頼され「社会実験の結果と今後のまちづくりについて」と題して講演した。また、同セミナーのパネルディスカッション「郡山市の中心市街地におけるまちづくりについて」のコーディネーターを依頼された。

■平成18年度の卒業研究発表会は、2月1日に新教室棟の7014教室(五十嵐ホール)で開催され、各研究室代表の17題が発表された。(本誌にプログラム掲載)

■土方助教授は、2月7日と2月15日に、郡山市より郡山市中心市街地活性化ワークショップの統括リーダーを依頼された。

教室ニュース

■若井教授は、須賀川商工会議所主催の地域資源∞全国展開プロジェクト委員会成果発表会において、委員長として基調報告を行った。(2月17日、於・須賀川市)

■平成18年度の大学院修士学位論文発表会は、2月19日に新教室棟7034教室で開催され、博士前期課程在籍者14名が発表した。(本誌に発表プログラム掲載)

■土方助教授は、福島県景観アドバイザー派遣事業により、二本松市景観セミナーの講師を依頼され、「景

観とまちづくり」と題して講演した。(2月22日)

■土方助教授は、3月3日、喜多市より都市計画審議会委員を委嘱された。

■濱田助教授は、3月6日、日本建築学会第59回音シンポジウム「重量床衝撃音の標準衝撃源」において「標準重量衝撃源による床衝撃音と生活行為による床衝撃音の対応に関する聴感評価実験」の発表を行った。

■人事：大濱教授は、本年3月28日付で本学を退官される。最終講義が、1月17日に工学部新教室棟7014教室で開催された。最終講義終了後、新教室棟9階多目的ホールにおいて退職を祝う会が盛大に開催された。

